

山部の元気づくりを目的に、 コミュニティスペースの開所を目指しています

小濱 有希子 (おばま ゆきこ) さん

1980年鹿児島県生まれ。深く考えずに訪れた富良野で見た景色に感銘を受け、「この景色が見られるなら北海道に住もう」と決意し、2011年に移住。ライターを生業とする中で観光地域づくり関連の仕事を渡り歩き、結婚を機に念願の富良野市へ！山部地区に住まいを設けた。山部の元気づくりを目的にコミュニティスペースの開所を目指している。

北海道に移住 (U・I・Jターン) して、地域を巻き込む取り組みをする輝く人を紹介するインタビュー。お話を伺うのは、北海道各地を探訪し想いを形にする人との出会いをつなぐ、地域プロデューサーのかとうけいこさん。28回目となる今回は、富良野市の東端にある「山部」地区で築約70年の元旅館だった建物をゲストハウス&コミュニティカフェとして再生し、旅人や地元の人たちが集まる場所を作ろうと奮闘している小濱有希子さんです。

北海道に移住されてから今までのことを簡単に教えてください。

移住し13年目になりました。札幌、旭川、札幌、旭川と動き、今、富良野に落ち着きました。まず、2011年11月に札幌市民になり、緊急雇用対策制度で札幌市内のシンクタンクに5か月勤務しました。仕事は地域活性事業で、日高エリアに通っていましたがね。2012年5月に総合印刷会社に入社、翌日から地元の編集プロダクションに出向。2013年9月に「JP01」という情

報誌を発行するために出向解除となり、旭川営業所に転勤し、その後札幌本社に戻りました。2018年3月に地域活性化と真ん中の旅行会社へ転職。2022年6月、「5年以内に夢だった富良野に住む！」という目標を掲げ、旭川へ戻りました。現在は、デジタルマーケティングの会社で、編集やライターをしています。そして、この年の8月、かねてから知り合いだった主人と初めて2人で食事に行きその日に付き合うことを決め、3日後に結婚を決め、2週間後に入籍…、今は富良野に暮らしています。

富良野市山部地区について教えてください。

鉱山開発などが進み、昭和初期～中期には5,000人を超える人が暮らす賑やかな街だったそうです。地元のお年寄りも、「銭湯が2つ、映画館もあったよ」と話してくれます。しかし、富良野市がドラマ「北の国から」のヒットにより観光地として有名になる一方で、山部からは人が離れていきました。現在は600人を切っています。

私たち夫婦は静かで互いに顔の知れた相手と、のどかな暮らしが好きですが、2024年3月には、JRが廃線になり、唯一のスーパーマーケットが閉店。富良野中心街とのバスは一日5往復程度です。中学校はずいぶん前になくなり、小学校の生徒数は30人を切っているようです。こうした事実を見ると、明らかにここは過疎地域です。でも、この地に暮らすおじいちゃんおばあちゃんは毎日、畑や花壇を手入れし、冬は雪かきに精を出してニコニコ笑っています。30代、40代の働き盛りの世代もいて、家業の農業などで忙しい中、自分が育ったこの町の将来を考え真剣に街づくりのことを考えているのが、今の山部です。

ゲストハウスとカフェ作りが始まりましたね。

はい、「山部でゲストハウス、カフェを仲間と共にDIYで作ってみたい」と行動しています。物件探しを始めたころには、実はイメージもそれほど明確ではありませんでした。この建物に出会えたのは、商工会に行って、山部で空き家ないですか？と尋ねたところからスタートしました。元々割烹旅館として建てられた建物があり、そこはオーナーが代わっても民宿として営業し、外から来る人と地域の人とが交流する場

として活躍していたそうです。この場所を、快適に過ごせる場としてリノベーションし、ゲストハウス&コミュニティカフェとして運営することにしました。

DIYに取り組んでいる宿のイメージを教えてください。

お客様は15人ぐらいを限度にしたいと思います。私たち宿主が住んでいてリビングでわいわい会話が繰り広げられる場所にしたいですね。“地域の人たちと外から来る人たちが交流し、山部が元気になる場を作ること”これが目指すところです。個人旅行者をメインとし、地域の食事処の利用を促し、地域にお金が落ちる仕組みを考えています。そして、地元の農家さんの野菜や果物で、山部の風土を感じる朝食の提供を予定しています。地域の人と旅行者が交流できるカフェスペースも作ります。旅行者だけではなく、地域の人が「ちょっとお茶しようよ」と集まれるコミュニティスペースも確保します。あと半分の人生をかけてやっていきます。

今後についてのお考えは？

山部は穏やかでとってもいいコミュニティなんです。が、地域の人たちが皆で集える空間の必要性を強く感じています。ただ、場所があるだけではそれは成立しません。場所を訪れた人をつないでいく人がいないと、新たな動きが起きないし、次につながらないような気がします。それで、まだまだ新人ですが私たちが「かすがい」になれたらいいなと考えています。

振り返ると、地域活性化を主テーマにした仕事に私は10年以上取り組み、地域の人たちが集まれる場所や仕組みがあったらいいなとずっと感じていました。それを今、この山部で私がやればいいのか。それを実践できる状況が今なのか？私たち夫婦がこれから暮らすこの地域を元気にしたい。子どもたちが、進学や就職で一度山部を出て行っても「帰ってきたい」と思える場所にしたい。そのためには、今いる大人たちが楽しく元気で、未来に希望が持てる活動をしていることを感じてもらえるのが大切だと思っています。

(2024年5月取材)

インタビュー後記

出会って10年の小濱さん。今回お話を聞いて、素直さ、しなやかさ、そして、引きの強さを感じました。仕事先も周りの人から「今のあなたにあの会社が合っているのでは？あなたのような能力を求めているから…」と勧められて面接に行く…という自然な流れで、今があるような気がします。山部に泊まりに行かなくちゃ！

かとう けいこ (株)まちづくり観光デザインセンター代表